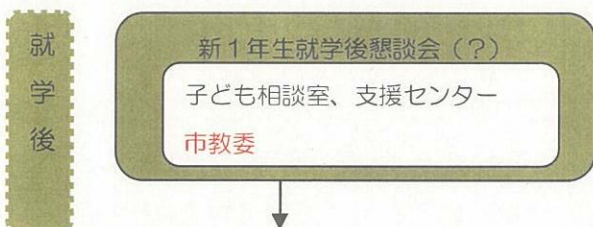


保育園訪問をするときに、市教委の就学指導担当の方も一緒に毎回来てもらい、その方は主に年長クラスのお子さんを見ます。つまり、年長クラスになると、市教委の人も入ってきます。

就学について保護者の心配が顕著になってくると、教育相談申込書を保護者の方に事前に書いてもらい、その後教育相談を実施します。これは発育発達相談（子ども部子ども相談室）とは違い教育委員会のほうでやっているものです。

教育相談は繰り返し何回もおこなわれ、インテークの面接、再相談、場合によっては検査実施（WISC-Ⅲ、養護学校教育相談専任（特 Co 的役割をしています）が実施）、検査を受けての再相談、小学校見学、就学指導委員会判定の結果報告、希望先の小学校 T との懇談（どんな体制で受け入れができるか）、申し送りの会議（保育園での対応、保護者の希望、小学校の受け入れ体制等を全員で共通理解）などをおこなっています。



就学後は、年長クラスのとときに保育園で加配が付いていたお子さん・その他特に必要と思われるお子さんに関して、4月～6月の間に、全小学校をまわって、担任の先生と懇談します。子どもたちの行動観察は基本的にはできませんが、その後のお子さんの様子について、担任の先生などと情報交換します。必要に応じて、その後個別のフォローをします。

北信の特徴は、のりしろ部分がしっかりしていること、密度が濃いこと（連絡したりやりとりをする回数が多い＝毎日のように頻繁におこなっている。／やりとりする相手が変わらない・同じ担当者）が言えると思います。全体イメージ図参照。

また、乳幼児健診から始まり、療育グループ（だいたい1～2年くらいの間参加）を通して、関係者間で本児に対する共有の場を積み上げていくプロセスがあります。療育グループと保育園訪問での支援を合計すると、多いお子さんは就学相談前に3～4年ほど関わっていることになります。

関係者が、療育グループや保育園訪問などの同じ場に一緒に参加することを通して、実際に子どもたちを目の前に見て様子や状態像を知り、変化の過程を共有しながら時系列的に追っていくプロセスが、そのまま就学相談、就学後に引き継がれていきます。就学相談（事業名としては教育相談）のときに、皆が共通理解のもとで話をすすめていくことができます（皆＝市教委・保健師・療育 Co・保育園など）。

だから、いきなり就学相談ではなく、乳幼児健診で心理相談にまわった時点で、もうすでにチーム支援が始まっていることとなります。そのころからの積み上げになります。

この、健診から始まる、関係者間の共有の場の積み上げ、そのプロセス作りの仕組みがあるところが北信の特徴ではないかと思います。

## ●自立支援協議会（療育部会）の効果が大きい

あと、いまの北信圏域の一番特記すべきことは、療育支援部会がかなり成果をあげて動いていることだと思います。

この地域の課題を皆で共有し、課題解決のために必要なことは何かをリアリティを持って話し合い、実際に課題解決のために複数の市町村が集まって現実的な解決策を導き出したことです。予算がついたことは大きいです（家庭相談員の存続、村部の療育グループ）。一つの村では解決が難しいことを、皆で共有し、そのためにできることの役割分担をして、解決に結びつきました。今後は、この療育支援部会が、この地域の療育分野でのエンジンになるのではないかと思います。

いままだできていないこと、教育との連携や、就学前の仕組み（中野市はかなりできてきたが他はまだそこまでいっていない）の他市町村への般化、などなどは療育支援部会を通じてできていくのではないかと思います。

○全国各地で実施が見られてきている、5歳児健診は興味深いですが、スクリーニングという意味では、北信圏域ではそれまでの健診フォロー体制や保育園訪問により対象児をほぼ把握できるため、そういう意味では5歳児健診の必要性は少ないと思います。ただ、保育園訪問で家庭へのアプローチがしづらいときに5歳児健診が契機になる、とはいえると思います。グレーゾーンのお子さんに対して、保育園訪問に加えて5歳児健診があると、家庭へのアプローチがしやすくなると思います。5歳児健診を導入する場合には、年長になってからおこなわれる就学時健診や就学相談とどのようにつなぎ合わせていくかの仕組みを考えたいほうがよいと思います。

○就学前後の教育へのつなぎに関して、保健師が教育の方へふみこんでいく場合と、教育の方が就学前におりてくる場合と、あると思いますが、今回の地域事例の中では、その両方がなされているのは見当たらなかったかと思います。

北信圏域はその両方がおこなわれています。同じ場で、リアリティをもって対象児を共有できる、ということが重要かと思いますが、それが就学前の一場面のみだったり、就学後の一場面のみではなく、お互いにお互いの領域にまたがって互いに共有し合う、のが一番良いのではないかと思います。両方ののりしろがしっかりとくっついていることだと思います。